



バンコクのBAAC本店にて業務協力に関する覚書の調印式を開催

情報企画部 タイの金融機関と 覚書を締結

日本公庫農林水産事業は、タイの政府系金融機関である農業・農業協同組合銀行(BAAC)と業務協力に関する覚書を締結しました。日本とタイは、農業従事者の高齢化、気候変動・自然災害への対応、スマート農業やグリーン農業の推進などの共通課題を抱えています。覚書の調印式にてBAACのチャチャイ頭取は「持続可能な農業発展という理念を共有する金融機関同士の戦略的協力の重要な出発点」とあいさつ。業務協力を通じ、両機関の業務運営の質的向上と両国の農業・農村の持続的発展への貢献を図ります。(5月30日)



清流「高津川」流域の特産品の魅力をPRする生産者ら

松江支店 信濃屋六本木ヒルズ店で 「しまねフェア」を開催

島根県、益田地区広域市町村圏事務組合との連携により、信濃屋六本木ヒルズ店で「しまねフェア」が開催され、アユをはじめ、清流日本一に選ばれた「高津川」流域の特産品をPRしました。このイベントは、2024年11月に開催した現地訪問型商談会に参加した株式会社信濃屋食品と生産者10先が取引につながったことをきっかけに実現しました。同組合の澄出賢哉課長からは「首都圏の客層は価格帯より商品のこだわりやストーリー性を重視することを実感した」との感想が寄せられました。(6月21・27日)



記者からは、輸出に取り組む事業者や新規就農者への支援実績についての質問がありました

情報企画部 農林水産事業 業務報告会を開催

日本公庫において、農林水産関連のメディアの皆さまに向けた業務報告会を開催。2024年度の業務実績と25年度の取り組みについて報告しました。冒頭、代表取締役専務取締役農林水産事業本部長の常葉光郎より「農業分野では『スマート農業技術活用推進資金』が創設され、第1号案件が実行されました。林業・水産分野でも、意欲的な取り組み事例がございます。こうした農林漁業者の皆さまの取り組みを全力で支えてまいりますので、一層のご理解とご協力をお願いします」とあいさつしました。(8月7日)



講演後の懇親会では、参加者間で活発な情報交換がなされました

松山支店 海面養殖業応援のため 養殖業交流会を開催

養殖業の盛んな宇和島市で「愛媛県養殖業交流会」を、愛媛県、愛媛県信用漁業協同組合連合会、伊予銀行および愛媛銀行の後援を受け開催。2回目となる今回は78人が参加しました。交流会では、熊本県で養殖業を営む株式会社ふく成取締役の平尾有希氏、大手飼料会社のフィード・ワン株式会社主任の大石岳人氏が、「水産養殖業の持続可能な未来展開に向けて」と題して講演。参加者からは「経営戦略の参考になった」「飼料の最新の動向がわかった」などの感想が寄せられました。(8月29日)

次号予告 冬1号(1月発行)

「輸出先の新規開拓と多角化(仮)」

少子高齢化や人口減少で国内需要の先細りが予想される食品・農産物にとって、成長する海外市場への輸出拡大は欠かせない。中国の輸入規制や米国の関税引き上げなどのリスクを、新市場の開拓などで回避する事業者を紹介し、今後の輸出事業の方向を考える。

ご意見募集

今号はいかがでしたでしょうか。感想やご意見をお寄せください。FAX・eメールなどで受け付けています。掲載させていただいた方には薄謝を進呈いたします。

FAX: 03-3270-2350
eメール: anjoho@jfc.go.jp

◆夏2号を拝読。「耕畜連携」という言葉を初めて耳にして、四半世紀以上になるのでしょうか。私が仕事に就いて間もないころ、畜産関係の講演や研修会が開催されると、そのタイトルにはこの言葉がほとんど加わっていたと記憶しています。最近「福」という文字も加わり、以前にも増して農を取り巻く環境には、連携で支えあうイメージが色濃くなり、あらゆる場面ですの恩恵を受けていることを実感しています。

かくいう私も、稲発酵飼料の利用者として支えられ、経営が成立していると言っても過言ではありません。しかし、私の場合は飼料を供給されるのみで、本来の連携には至っていないと感じていました。畜産業は他の業種と同様に世界

情勢の波に洗われ、新たな方向性を模索しています。そのヒントとして、畜産業が社会情勢に影響されず持続可能な経営活動を営むために、今までかわらなかった業界・業種との連携が必須となるのかもしれない。

各記事を拝見し、連携の基本は人と人。農業も人。地域経済の活性化、経営と地域の共生、地域の景観へのかわりなど……。それゆえ、人のかかわりは幅も広がり、奥も深くなります。その責務に対して連携をもつて対処することが必要と再認識しました。私たち食の担い手は、いま一度「連携」の原点を顧みて、食卓を守るアイテムとして、この言葉を育て、生かしていかなくてはいいと考えています。

(山梨県北杜市 荻澤靖)

編集後記

◆今号は「人材育成」がテーマですが、私自身は「子育て」の悩みが尽きません。今年8歳、5歳、3歳になる三姉妹は、それぞれの個性があり、家族で日々格闘しています。今回、人材育成のさまざまな取り組みをうかがいながら、人を育てるためには、まず自分自身が成長しなければならぬ、ということを実感しています。

(清野)

◆「新・農業人」で取材した松村社長という言葉が印象的だった。「愚痴なく、誠実であれ」。当たり前のことだが、このストレス社会では、愚痴の一つや二つは言いたくなるもの。ただ、社員の皆さまの笑顔がまぶしく、活発な意見交換がされるなど、思いが浸透すると、ここまで変わるのかと驚いた。「愚痴なく、誠実であれ」。私も変わろう。

(宮崎)

◆工藤氏による「フォーラムエッセイ」の「継続なくして成長なし」という言葉に胸を打たれました。長きにわたり野球選手として活躍されたからこそその説得力があり、ストレートに心へ響きます。当たり前のようですが、本誌をとおして、指導者の育成方針は、自身の経験などに裏打ちされたものであることを実感しました。

(岩本)

◆その先がきちんと見える環境なので、自分の成長を感じながら働くことができています」とは、「新・農業人」で紹介のインランド・デリーのホームページに掲載の若いスタッフの声。やりがいがある、うれしいなどの発言も並び、元気をもらえた。経営理念の「社員の満足を追い求めます」を実現する場なのだと感じた。

(水谷)

AFCフォーラム 2025.11 秋2号

編集

小柳 典義 清野 健 宮崎 善幸
澤田 真理 岩本 悠里 黒川 知洋
村上 裕紀 水谷 徳子

編集協力

金子 弘道

発行

株式会社日本政策金融公庫
農林水産事業本部

〒100-0004

東京都千代田区大手町1-9-4

大手町フィナンシャルシティ ノースタワー

Tel. 03(3270)2268

Fax. 03(3270)2350

E-mail anjoho@jfc.go.jp

印刷

株式会社DI Palette 東京本部

* 本誌に掲載している記事、写真、図表、データなどをご利用になりたい場合は、事前に当社までご連絡ください。